女体化した俺と、妻と妻の新しいカレシ
TS
リボルバー

第２話　女への教育。　（体験版）

何度かエロ本で見たことがあるような『朝起きたら性転換していた』という結果を望んでいた。
しかし現実にそうは上手く行かない。薄々分かっていたことだ。
ガラガラと檻の前に病人を運ぶ担架（救急車につんである車輪付きの奴だ）を警棒が押してきて、俺に看守長が声をかける。

「囚人番号：３―０５７番。今から手術室に貴様を連行する」

そう言うが早いか、警棒が俺にめがけて銃口を向けた。警棒の持っている獲物はピストル。恐らくは警察が使用しているニューナンブと同系統だろう。俺はひっくり返って必死で銃口から逸れようともがいた。その姿は恐らく芋虫のように哀れで情けないものであったに違いない。
されど、許されるはずもなく。

「ア〇ルに当てたら、お昼ごちそうしてくださいね。看守長❤」

「……いいだろう」

「やったーっ！」

発砲の音が聞こえたのは、俺の陰嚢に何かが突き刺さった瞬間の痛みが走った後だった。意識が混濁していく中で、担架に乗せられて両手両足を拘束。

「ア〇ルではないな」

「えーっ！
ああ、ホントだ。
キン〇マに当たったのかぁ。残念。
でも片方、麻酔銃のタマで潰れてますよ」

「……」

「どうせ切除するんだし、ちょうど良いんじゃないですか？　コイツにとっては人生最後の金玉潰しですしね❤」

「…そうだな」

その後も2人はおしゃべりをしていたのだろう。俺が内容を聞き取れたのはそこまでだ。どうしようもなく怖かった。このまま死ぬかもしれないという不安がかぶさって、どうしようもなく身体が震えた。もう何も出来ないくらいに怯えていた。

生まれてこの方、身体は丈夫な方なので手術も入院もしたことがない。それなのに、いきなり性転換手術だ。怖くてどうしようもない。

目隠しをされ、耳にパッドを嵌められ、何も感知できない状態でどこかに運び込まれ、俺は手術を受けた……らしい。

情報を感知できないようシャットアウトされ、そのまま手術をされたようだ。何時間眠っていたのだろうか？　あるいは何日間か眠っていたのかもしれない。

最初に感じたのは頭痛だった。ズキズキと頭が痛む。目を開けるとそこは、元々俺がいた汚い独房だった。

次に感じたのは乾きだ。とにかく何かを飲みたい。なんでもいいから水分が摂りたくて仕方がない。ベッドから這い出てあたりを見回しても水道らしきものは何もなかった。

「水？」

「あ…」

警棒がこっちを見て、笑っている。例によって看守長も一緒だ。警棒の片手には、ボル〇ックが握られている。俺はそれから目を離すことが出来なかった。

「…来い」

「くくく。びっくりするよ」

俺は水飲みたさに鉄格子に近づき、彼女たちの次の指示を待った。警棒がなにかガサガサと人の大きさはあろうかというボードを出している。

「見ろ」

看守長が俺に鉄格子を挟んで見せてくれたそれは、姿見の鏡だった。そこには間違いなく、俺が映っている…はずだった。
だがそこにいたのは俺ではなく、裸の女性。背も俺よりも2回りは低い。いやガタイが小さいだけで、背は変わらないのかも知れない。
しかしどちらにせよ、華奢な女性だった。
腕も足も細い。何よりも細くなっているのが腰だ。くびれている。こんな腰で立っていられのかと不安に思うほどの頼りなさだ。
そして目を引くのが胸だ。自分で自分の胸を手に収める事ができない程に、大きく膨れ上がっている。

「あ…、あ…ああ」

「これが新しいお前だ。囚人番号：３―０５７番。
今日から女として生きていく術をここで学んでもらう。
期間は一ヶ月となっているが、覚えが悪いと延長もありうる。
よくよく学べ。以上だ」

「ま、待って……」

「待って？」

警棒の言葉に俺は慌てて口を塞ぐ。

「ま、待ってください」

「何だ。囚人番号：３―０５７番」

「あの……水を…」

「駄目だ」

看守長はそれだけ言うと、行ってしまった。追うように警棒が歩き出す。しかし警棒は俺にヒントをくれた。それは悪魔のヒントだったが……。

「トイレは水洗式だよ」

それはつまり、便器に溜まっている水でも飲んだらどうかという悪魔の提案だった。警棒がいなくなったのを見て、俺は洋式の便器にしがみついて中を覗いた。
見たこともない汚れが便器にこびりついている。色は黄色いが似たものを探せと言われれば、イボのようにも見える。
黄色いイボが連なって、便器にびっしりとこびりついているのだ。

（これを…飲めと？）

「畜生がっ！」と思いっきり叫びたかった。しかし、声が出ないほどに喉が渇いている。
しかしすぐに気がついた。水を流せば新しい水が便器に流れ込む。それならこの汚れた水を飲まなくて済む。俺は、慌ててレバーを引き、水を流した。その水は透明で飲んでも問題無さそうに見える。
手ですくった一杯は、美味しくはない。薬品臭い水だった。先ほどの警棒が飲んでいたボル〇ックが羨ましくて仕方がない。
しかしとにかくは乾きが収まるまで、飲むことが出来た。が、どうにも嫌な予感がして顔を上げると、そこにはペンキで直接、壁に文字が書かれていた。

『トイレは一日1回まで』

試しに一度レバーを引くも、もう水は流れない。俺は看守長の言葉を思い出していた。

『食事、排泄、風呂、教育。すべてこちらの指示通り・時間通りに行ってもらう。』

たしかに言われた。間違いなく言われた。しかし、悔しくても辛くてもここでは規則が全て。とにかく、外に出るまで辛抱だと自分を鼓舞して、立ち上がり何気なく鉄格子を眺める。
そこにはまだ、姿見の鏡が置きっぱなしになっていた。あの距離だと手は届くまい。されどそこに映る自分は間違いなく見えた。
これが新しい自分。
顔は……可愛いのが少しばかりむず痒い。こんな顔の女が街を歩いていたら、振り返って見てしまうだろう。ボーイッシュに見えるのは髪型のせいだろうか。髪だけは男の時のそれと変わらない。ただ骨格にどうにも心許なさが残る。こんな体では男に抑えつけられたら、抵抗など絶対に無理だ。力に頼るには、少し華奢過ぎる。

「アンタ、新人かい？」

「え？」

鉄格子の向こうから声がした。
話しかけてきたのは恐らく隣の独房の人間だ。口調は男のものとも品のないオバサンのものとも取れる話し方だが、声は間違いなく若く、声だけで美人と分かる声だった。

「あ…はい。菅谷　雅人です」

「あ、名前はいいよ。ここではナンバーが貰えてるだろ。あれで名乗らないと『懲罰』だぜ」

「ちょ…懲罰？」

「ああ。俺もまだ受けたことはないけど、かなりキツイらしい」

「そ、そうですか。あの囚人番号：３―０５７番です」

「そうか。こっちは３―０５５だ」

「よろしく」

「ああ。で？　アンタは何をやったんだ？」

「え、えっと…痴漢です」

「ははっ。そりゃ重罪だ」

「そうですか」

「ああ。俺はセクハラ。冤罪だがな」

「俺もですっ！」

「しっ！　あまり騒ぐな。うるさくすると看守がくるぞ。アンタもケツを犯されたろ？」

言えなかった。自分は犯してすらもらえず、フェラだけで我慢汁を撒き散らし、人生最後の男としてのＳＥＸを終えたことを。

「なんだ？　犯されなかったのか。そりゃあ、これから看守の格好の餌食だな」

「……」

「朝は４時起き。ま、ぶっちゃけ何時に起きてもいいんだが、６時までに化粧やら身支度やらすませて看守に認めてもらえないと、禁固期間を延長されるぜ」

「け、化粧？」

「ああ、アンタ。ここのこと何も知らないんだな。いいぜ、教えてやる。その代わり……」

「その代わり？」

「メシもらったら、一品オカズをこっちによこしてくれ。女の体になるためにダイエットをさせられてるんだが、腹が減って死にそうなんだ。頼むよ」

「分かりました」

「アンタ、聞き分けがいいな。ありがてぇ。
ここでの看守は教育係も兼ねていてな。あいつらに認めてもらわないと、次のステップに上がれない。次のステップに上がれると少しづつ自由度が増して行くんだ。ナンバーの少ない奴は、大概が上のステップにいる。あいつらは化粧道具から、身に付けるものまで支給されている。アンタ、今裸だろ？」

「……はい」

「いや、いいんだ。隠さなくて。
正直に言うと、俺もだ。
最下層は服さえも与えられない。
それどころか便所もろくにさせてもらえない」

「……」

「それがここでの俺達だ。とにかく看守に認めてもらって、上に上がらないと何時まで経ってもここにいることになる。世間じゃ、シャバに出るまで1ヶ月程度って言われているけど、そこから見えるかい？　この通路の端。一番奥はここの主の独房でな。もう丸3年。衣服も着ずに過ごしているらしい。ありゃあ、早死するぜ」

「3年も……」

「ああ。だからとにかく看守に認められるよう努力しろ」

「わ、わかりました」

「おい。忘れるなよ。オカズ一品。こっちによこすんだぞ」

「え、ええ。ありがとうございました」

おれと55号さん（おれは隣人をそう呼ぶことにした。囚人番号が3―055番だからだ）の会話が終わってすぐに、独居房の通路の奥（先程は気が付かなかったが、恐らくはそこも鉄格子が付いているんだろう）で重々しい鋼鉄の扉が開く音がしてすぐに、鍵をかけ直す音がした。

「よーしっ！　小娘共っ！　オマ〇コの時間だっ！　全員、ドアの格子の間から両手・両足をだせっ！」

警棒が大声を張り上げると、隣の55号さんが手と足を格子から出しているのが見えた。俺はそれに従ってドアの格子から両手両足を出す。そこだけは横15センチ、縦10センチほどの格子のない窓が上下に2つあって、手首から先、足首から先が出せるのだ。そこに警棒と看守長が次々と手錠、足枷を嵌めていく。

「あーらっ！　最後は新人の057番じゃない。
初めてのオマンマン楽しみねぇ？」

女が口角をあげると俺の心模様は二通りにきっぱり別れる。この女をもっと笑わせてやろうと思うか、黙らせたいと思うか。
警棒に対しては、後者だった。しこたま警棒で叩かれているからだろう。
きょうの警棒の獲物は電気スタンガンだった。それも今までネットでみたような玩具じ

やない。音も光も抜群にその威力を物語っている強力なやつだ。

「よ、宜しくお願いします」

「あら？　返事をすることだけは覚えたのね」

「…はい。すみませんでした」

「うふふふ❤　もう参ちゃったの？　心配だなぁ。これかがら大変なのに」

「……」

看守長は俺の手首に手錠を。警棒は俺の足に足枷を嵌めて、独房の格子扉を開けてくれた。廊下に出て周囲を見ると、うら若く華奢で、胸の大きな女性ばかりが一列に並んで自らの膝に手をつき、廊下側にお尻を突き出している。

「囚人番号：３―０５７番。貴様も同じようにしろ。頭は下げて、ケツと同じ高さでキープ。分かるな？」

「は、はいっ！」

自分でも何をされるのかよく理解できた。これは女性化の為の訓練。つまり女性器をイジってもらい、イジリ方を覚えさせられる訓練だ。

「看守長。お願いします」

「ああ」

俺が女囚人たちの列に並んで同じポーズを取ると、看守長は俺の股間から弄り始める。いきなりマ〇コに来るかと思っていたが、まずはア〇ルにゴム手袋の感覚が襲ってきた。

「はうっ！」

予想以上の刺激の強さに声を上げて、すぐに『しまったっ！』と思ったが、何のお咎めもない。そのまま、ア〇ル周辺を揉みほぐされている。目だけでこっそり横を見ると、囚人は皆、一様に目を伏せていた。そして警棒さえもおれが声を上げたことを、指摘したり

しないでいる。

「声は上げても、構わん」

看守長はそれだけ言うと、俺の肛門から女性器に向かって手をずらしていく。大陰唇の表面を撫でて、上から下に。撫でられるまで気が付かなかったが俺の女性器には毛が無いらしい。看守長の手が滑りとむず痒さを俺の皮膚に残して、指がもろに肌の表面を撫でていく。看守長の手袋が濡れているのか、自分の身体が濡れているのかわからないほどに全身から汗が吹き出していて。そして、俺の皮で包まれていた女性器の中に看守長の指が割って入ってきた。

妻のマ〇コをめくった時のあの感覚がフラッシュバックして、自分が看守長にどう見られているのか容易に想像できる。妻のマ〇コを初めて舐めた時に舌で感じたマ〇コの肉が、大陰唇の肉が押し広げられたまま、中の小陰唇部分など無いかのように無理やり力任せにめくり上げられ、膣の中に看守長の指が無理やり侵入してきたのだ。

「くぅっ！」

痛む。痛くて、嫌になるくらいに。

その時自分の胸がたゆみ、揺れ、顎に当たった。

たぷんと音がなったような気さえした。

それが嫌だった。どうしようもなく。

まるで自分の胸、身体が誰かそうされることを望んでいるかのような反応を示したことが嫌でたまらなかった。

だからというわけではないのだろうけど、元々マゾ気質があった俺にはそれが無性に甘い誘惑に思えた。理性では止められない強制的に自らを『誰かに犯される快感を望む』という快楽に堕ちるのが。

だから揺れたくなくて膝に、手に、腹筋に力をいれる。

無駄だった。

もしもまだ身体が男なら耐え切れただろう。

今は違う。

俺は女になった。

だから身体に力が入らなかった。

揺れることに耐えられなかった。

看守長は恐らく、俺がこうなることを知っていて俺の膣の中に指を出し入れしているの

だろう。いわゆるピストン運動というやつだ。
その動きは決して早くない。ゆったりとさえしていると言っていい程だ。しかし、それを考慮に入れても俺は、揺れていた。揺さぶられていた。
胸がたゆんたゆんと揺れ、乳首が空気に擦れる度に自分が犯されているのだと実感せずにはいられない。

「ふむ。感度良好だな」

「元々、そういう願望があったんじゃないですかぁ？」

「……かも知れん」

俺の反応を見て、看守たちがなんの遠慮もなく自分勝手な感想を並べているのを、俺は夢見心地な気持ちで聞き流していた。普段なら怒りを感じるはずの言葉も、看守長が次の行動に移っていて、その艶めかしさに飲まれてしまっていたからだ。
看守が次に触ってくれた場所。それはクリト〇スの皮。これは感覚として間違いなく男だったころの皮を向く感覚そのままだった。あの頃よりも幾分か皮が厚くなって、剥かれにくくなっているような気もするが、触られている感触はあのころのまま。
剥かれた後、皮の中のクリト〇スの突起の一番上を指で撫でてもらった感覚が、俺の知っている『亀頭を他人に、それも優しく撫でられた感覚』と同じだった。
その一連の感覚に俺は酔ってしまった。飲まれてしまった。陶酔していた。
自然と息が熱くなる。
そのことを認めたくなくて、俺は下唇を噛んだ。
眉間には変な風に力が入っている。
それでも口の合間から抜け出る空気が、……熱い。

この日の最後、最も複雑で、男だった頃は感じたことのない快感にまみれた。
それはクリト〇ス愛撫と、膣の中へのピストンの同時責めだった。
頭が快感を処理しきれない。
もしもその２つへの刺激がシンクロして、同じ動きをしていれば混乱などしなかっただろう。しかしそれらは全く別のリズム。全く別の動き。全く別の快感を俺に与えた。
数秒前に生まれて初めて得た膣への挿入感に、亀頭を優しく撫でられている快感。その２つが同時に来る。
俺は……自分のクリト〇スが勃起していることに気がついていた。恐らくは看守長も気がついているだろう。膣が触られてすぐの頃よりもさらに濡れている。これも看守長は知っているのだろう。

恥ずかしかった。
でも一つだけ、看守長も知らないはずの秘密がある。
俺の乳首が……勃っていることだ。
これだけは知られたくない。
なんとなしに、決意にも似た思いがあった。
これ以上、恥を重ねたくなかっただけなのかもしれない。
しかし……。

「ぷっ。コイツ乳首が勃ってきてる（笑）」

警棒の情け容赦のない一言に俺は、目を強くつぶった。
それしか出来なかった。
それしか反抗する術を持っていなかった。
そうすることで現実に耐えられるよう努力するしかなかった。

「ふむ。まぁ良いことだ。次の段階を考えるべきだな」

「あはははは。良かったね。囚人番号：３―０５７番。
褒めてもらえたんだよ？
御礼はどうしたの？」

「あ、あぅ……」

「なぁに？　聞こえな～い」

「あ、あの……もう少しで……その……逝けると……それでその……」

「駄目だ」

「え？」

看守長はそれだけ言うと、俺の股間から手を離し、俺のケツを手で一発払うように叩いた。そして悪魔の宣告を俺にする。

「囚人番号：３―０５７番。貴様は次のステージだ。豊胸手術に回す。肉体の負担を軽減化するため、今日から一週間は、貞操帯を付けてもらうからそのつもりでいろ」

「そんな……」

「あはははは。残念だったね❤」

警棒が笑う中、俺の股間には革製の頑丈な作りの貞操帯のベルトが巻かれた。これではオナニーどころか、用を足すこともままならない。

「その……トイレは……？」

「安心しろ。排泄の時間は取ってやる」

それは……手術までの一週間。

毎日、黒髪の美しい女性看守たちに排泄を見られるということを意味している。

そのくらいは俺でもこの時点で十分に理解できた。

絶望する俺を他所に、看守たちは次々と囚人の股間をまさぐって、『教育』を施していった。

体験版は如何だったでしょうか？

２０１２年１２月末発売開始予定です。

どうぞご期待ください。